

松江城の空間構成をめぐる研究視点の提言

堀田浩之

はじめに

城郭に対する現代の人々のイメージとしては、時代劇で馴染んだ近世城郭のスタイルが、もはや定番となっているのではなからうか。外部からの侵入を防ぐべく石垣の護岸で堀や城壘を堅固に構え、さらに要所を門や塀・櫓で折り重なるよう配置しながら、境界の守備力を著しく高めた中心部には、周囲の視線を一手に集める天守の威容が聳え立つ。確かに、新しい時の支配者の登場に相応しい、見た目でも華やかで判りやすい構図ではあった。

「戦う」城から「見せる」城へ。近世城郭とそれ以前の城郭の違いを、それぞれの機能差に着目した象徴的な言葉で評価を行う論調が、今日では数多く認められる。戦国の世の終焉とともに創出された近世城郭には、狭義の軍事性の枠内では捉えることのできない、空間構成の作為についての確信的な痕跡が認められるのである。江戸時代の築城以来、人々を魅了しながらその存在を地域社会の個性にまで熟成させたとすれば、現代に至る近世城郭としての松江城の意義を、もう一度再検証してみる機会が求められよう。

本稿では、空間論の立場から城郭史の中での松江城の位置付けを試みる。ただし視界を広げて、同時代の他の城郭事例との比較を通して松江城の個性を際立たせる作業を行う。近世城郭は単なる軍事施設ではない。城郭とその空間を介して発信された政治的なメッセージの表現であり、理想とする城郭

の価値の体系を志向した結果の形でもある。ここで提言する考察の方向性は、従来行われてきた城郭概説とは多分に趣を異にするかもしれないが、松江城研究の更なる進展の可能性を導く意味でも、論点整理を兼ねた幾つかの問題提起とその方法論を始動させておきたいと思う。

一 近世城郭としての松江城の条件

松江に新城を定める際に、城山の候補地となる荒隈山と亀田山をめぐる^{〔注〕}、堀尾吉晴・忠氏親子の間に見解の相違があった逸話が、よく知られている^{〔注〕}。物流や情報の拠点を中心とした意図に、河川交通を介した下流域の入海部に移行しようとした意図に、新時代の近世城郭に相応しい立地条件を見出せるのではあるが^{〔注〕}、床机山からの展望において親の吉晴は山城の効用を殊さら主張する。「山台広くして頂きに平地を得る事裕かに、前は湖波に浸り、(中略)敵は船ならでは近より難く、後は高嶺に遠くして、敵の偵望とし瞰射の距離に入らず、正に是れ鎮城として大いに築くに適せずや」と説く吉晴の城郭観に、乱世を生き抜いた武将としての、実戦経験豊かな軍事面での自信と配慮が窺える。

一方、若い世代の忠氏は、「此山台広くはあれど、広きにすぎて、天主も五重とせざれば、櫓と見られなん、然して吾等の財力にては、経営覚束無

く、恐くは五十万石以上の力ならば、築き難くも候はん」と、施設の維持管理の観点からの懸念を表し、戦時対応優先の父親の立場とは対照的な新規の評価を示したのであった。かくして、亀田山の周囲の地理環境（深田・湖水・古城など）をうまく利用し、軍事施設に準じる有事の見立てを施すことで、平時にあっても一定の機能が期待できる城郭空間の確保を忠氏は指摘する。しかし、それでも吉晴の不安は払拭できず、「其山小にして低く、恰も平城の如く見ゆるを如何にせん。予は平山城を好むものなり、兎角は更に考要する処あるべし」と言い放った。

吉晴は山城の存在感に随分こだわっているように見える。今では近世城郭の典型とさえ思える亀田山での松江城の立地を、「平城」と酷評して再考を促す吉晴の視線には、実戦に耐えうる好ましい城地には当たらないとする、どこか自分と相容れない異質な城郭観を感じ取っていたのであろうか。この逸話が、親子の世代間での理想の城郭に向けたイメージの断絶を物語っていたとすれば、非常に興味深いものがある。江戸時代に一般化する近世城郭のスタイルは、やはり中世の要害から続く城郭史の流れとは、別系統の価値指標に基づく対象なのであろう。確かに戦時であれば、吉晴の推奨する山城での備えは最も望まれる選択であったと思われる。軍事施設として自立・完結しうる空間の展開こそが「山城」のメリットとされ、城内を構成するための出来るだけ広い山台の獲得は、その城の防衛力のポテンシャルを高めるものであった。そういう意味からは、旧城の富田城の方が余程吉晴好みの城郭であったと言えるかもしれない。

さて、亀田山での新城では内堀で山麓部分までも大きく囲い込んだ空間が用意されており、先に吉晴の主張した城郭観と近いものが看取される。そこでは、全方向を水濠で結界された彼岸の山台が視覚的にも自他の位相を際立

たせる城地となっているのだが、およそ一般にイメージする近世城郭の曲輪のみでは、空間的に完結し得ない構成をとっていることに注意を要する。すなわち城地の一部分に、石垣で区画された主郭（本丸・二之丸）が設定されているに過ぎず、ゆったりと広がる山麓の平坦地や、谷間をも含んだ山塊の複数のピーク（現在の城山稻荷神社や護国神社の所在地）までが、有事対応の可能な予備地として城内空間を補完していた状況が、そこに指摘できるように思われる^{注3}。

強いて言えば、近世城郭は、建造物を以て恒常的な専有の意思が明示された空間部分を、対外的に表象化したもの^{注4}でも性格付けが出来るのかもしれない。戦時下の軍事行動を伴わない平時の居所としての城郭運用においては、城地の全てを継続的に機能させておく必要はあるまい。軍事施設として城^{注5}と銘打っているものの、実戦を想定した空間運用の次元とは大きく異なり、幕府の一定の統制のもと、周囲に「見せる」装置に特化したのが近世城郭の実相であった^{注6}。さればこそ、父の吉晴の城郭観に反論する堀尾忠氏の言説に納得がいくのであり、広大な荒隈山に立地を置いた近世城郭への造作は、見栄えの効果やその後の維持管理の配慮においても無理な相談だったのである。

城地に囲い込まれていても、軍事施設としての人工の造作が何もなされていなければ、他者からの「城」に対する公式の認識には及ばない。したがって、施設計画や現状の保守および変更について管理される対象でもある近世城郭には、軍事施設で表現された顕在化された城郭部分と、そうではないその他の潜在的な（有事に軍事施設への運用が可能な）城郭空間に二分されることになる。後者の場合、現状では維持管理すべき施設がないので、正規の城郭構成要素との認識に至らないのであるが、前者の空間は幕府に提出され

る城図への記載を以て、平時において機能する近世城郭の概念的存在を狭義に限定して体现する、極めて判りやすく操作されたイメージ対象にほかならなかった^(注5)。

なお、潜在的な城郭という研究視点については、中世城郭の特性から概念の理解を深めることができる^(注6)。すなわち、中世段階での城郭とは防禦装置を以て武装化を遂げ、敵対の意思表示が臨時になされた空間対象を、城郭と認識するのであって、むしろ平時にあつては維持されること自体が許されない異常物件であつた。もともとの城郭の概念は潜在的な(時に応じて顕在化する)存在であり、それが戦国時代の到来とともに武装空間の恒常化に及び、政治的なメッセージを込めた城主のステータスを表現する視覚対象へと、城郭の機能と性格を著しく変貌させた先に、今日広く一般に定着した近世城郭のスタイルが位置付けられることになる^(注7)。

また、本丸・二の丸・三の丸といった近世城郭に定型の空間表示も、あらためて考えてみれば興味深い検証課題の一つである。松江城の場合、城山の中央ピークに「本丸」の高台を定め、内部に南向きの天守をやや東側に寄せて建てている。「二之丸」は本丸の南隣に併設されており、本丸内では敷地の確保に至らなかつたであろうか、城主の御殿はこちらの方に建造されていた。城山の山上部に「本丸」「二之丸」の主郭が配置されたのに対し、数字の並びで続く「三之丸」は内堀を隔てた南外側の平坦地に区画され、約1町余四方の規模の居館を収める正方形の特殊な空間が造成された。南北方向に高低差を以て序列された三つの曲輪であるが、「三之丸」に居館が整備されるのは堀尾氏の時代ではなく、曲輪構成の築城当初のプランがどのようなものであつたのかは、不明としなければならぬ^(注8)。

さらに、城山高台の「本丸」「二之丸」と対岸低地の「三之丸」との位相

が余りに大きく、数字を付した曲輪呼称に基づく一連の縄張展開と捉えるには違和感が残る。仮に、堀尾氏の計画した城郭運用と異なるのであれば、やはり、今日に至る松江城の空間構成との間に一定の断絶があるのではないか。城郭としての戦時の完結を企図する城山(「本丸」「二之丸」と付加的な平時での生活・儀礼空間としての居城(「三之丸」)の対峙と併設、そして時宜に応じた計画の変更。城郭の空間構成の本質をそのような「動態」の視点で見直す時、顕在化した不変の「静態」に見慣れた私たちの固定概念や、城郭史研究の方法論もまた刷新されるのであろう^(注9)。

二 松江城の縄張表現に関する視点

ここでは松江城の縄張の問題点について、もう少し具体的な検証作業を試みる。まず平面プラン上での個人的な印象としては、本丸内で設定された天守の所在場所に興味深いものを感じた。近世城郭では、天守を介して周囲に向かって発信・表現されるメッセージ性の解明が、城郭プランの主要な構成要素を探って行く際の鍵となるのだが、松江城の天守は本丸の南北中心軸よりやや東寄り、曲輪内での中途半端な(本丸の東縁でも中央でもない)立ち位置であることに、殊更の違和感を漂わせている。天守のすぐ東隣には、祈禱櫓と石垣による墨線の張り出しが認められるのも気になるところで、本来は崖窪地にあたる城山の原地形の関係から地盤の弱さを露呈していたが、プラン上で既定された天守の座標を動かさないまま、その立地する足元の東崖側を補強する方法で現地対応が図られたのであろう^(注10)。

因みに、平面プランを策定する際に重要な条件となる天守の座標に関しては、縄張図面を眺めている内に幾つかの想定を得ることができた。本丸の西側墨線上に置かれた鉄砲櫓は、城内の櫓の中でも唐破風の意匠が施されてい

ることと特異な存在であるが^{注1)}、その建地平面図形の対角線上（北東方向に延長した先）には天守が同座標で位置しており、しかも双方の建地平面の対角線を共有しているように見える。また二之丸東下の馬溜では、枅形の対角線の北西先に天守の正面を見通す視線上の位置関係となっている。天守・鉄砲櫓・本丸南の枅形・馬溜などは同一の座標に基づいて場所を設定されており、まさしく築城のための中核となる座標計画を体現していたと言える。ベースラインを共有する意図的な空間構成の結果、対角線による位置指定等の人為的な操作もまたそこに看取されたのである。

なお、本丸の北方下の水手御門とその一帯の城塁、および本丸北西部（乾ノ角箭倉・ひずみ多聞・西多聞のあたり）は、天守や本丸南部を規定する座標と異なり、それより少し西向きに軸線を傾けている。城山の自然地形に依拠したものと思われ、実のところ水手御門から南下する城塁の基本ラインは、この座標に則り天守の北東隅をかすめた上で東多聞・武具櫓へと達している^{注2)}。かくして松江城の主郭（本丸・二之丸）の縄張は、自然と人為の二つの大きな座標群によって構成されていた状況が確認できたが、天守を規定する後者の座標がいかなる経緯で出現したのかは今後の検討課題である。更に三之丸の座標も同一であることから、本丸・二之丸・三之丸の顕在化された管理対象としての城郭部位は、同じ次元の空間ベースで構成されたことが判り、南面する天守の向きもその方向軸に一致する。

城郭内における曲輪編成と天守の向きについては、その城郭が有する空間秩序の方向性に関わる留意すべき問題点を含んでいる。すなわち軍事的な動線展開の想定のもと、その城郭の防御正面（大手側）がどのように認識され、城下町と近郊を含む広域空間の構想がなされたのかを端的に示唆するものであった。例えば丸亀城（香川県）の場合は、本丸に所在する三重天守と

本丸内の他の櫓の平面座標が異なっており、天守とその一帯以外の本丸内の構造物や二の丸は、城山麓の大手門や内堀を隔てた北面の城下町と共通の座標であった。そこに城と城下に亘る近世城郭特有の総合仕様の設計手法が観察されるのであるが、少し斜に構えた天守の視線はひとり港の方を向いていた。外来の船は真正面に仰ぐ天守を意識しながら海の玄関口へと入港し、視覚操作に伴う作画的な風景との遭遇を体感したことだろう^{注3)}。

さて、松江城の主郭（本丸・二之丸）と三之丸は、南北に連なる曲輪編成をとっているが、高低差を踏まえた空間上での序列表現がそこに施されていたとも言える。天守のある本丸は当然、最高所としての城郭の中核を担う絶対の上位にあり、手前に位置する二之丸がそれを補完するための付属空間のような役目を担うことになる^{注4)}。二之丸に御殿が置かれる理由の一つは、本丸に確保された敷地の広さにも影響するのだが、城郭であること（城郭を成立させる究極の原像）を自身の空間のみで表わす本丸の象徴性が、あまりに厳格であった際（例えば、名古屋城のような「本丸―將軍」「二ノ丸―城主」の位相関係）に、管理者としての城主の城内生活（平時の城郭運用）の部署とは、別格の不可侵の聖域をその空間外へ切り離そうとする、ユニークな認識の形が働いたものと考えられるかもしれない。

そして、まさしく本丸の象徴性が城郭の軍事イメージを純粹な概念にまで高めると、空間内の構成要素が精選され、城郭に付帯する天守等の一部の構造物以外の存在が許されない、「無用」の非日常の空間としての性格を増していくように思われる。有事には具体的な施設造成と空間利用が案出される筈であるが、平時は恣意的な手出しの一切が憚られ、もっぱら、城郭空間の深奥性を体現する特殊な環境ばかりが保持されるのであった。「見せる」城としての本質を特化させた近世城郭の理解は、出現した建造物の状況によつ

てのみ完了するのではなく、その城郭の有する存在感と期待値が、示唆に富んだ形で表現されているかどうかの認識の問題に掛かっている。もはや、物件の有無の概念を超えたところにまで到達した城郭観の進展に、当時の関係者の複雑な心性が窺えるようで興味深いものがある^(注5)。

次に、本丸の動線が南↓北の展開を見せるのに対し、城山麓から二之丸へは東↓西の動線で直交することに気が付く。馬溜の大手枿形を過ぎて、城山の主郭へはクランクを一箇所は喜んで広幅の石段を真直ぐ西上するのであった^(注6)。実は松江城の縄張では二つの方向軸で導かれた城郭空間が融合されており、それが各々の曲輪名称にも反映している。既に述べたところの本丸・二之丸・三之丸は南↓北方向への並びであるが、元文三年(一七三八)の松江城図(石垣修理伺い)を見ると、現在は「二之丸」下ノ段とも称される米蔵の所在した城山東麓を「外曲輪」、天守とその間の中段を「中曲輪」と表記していたことが判る。ここでは地形の高低差に応じた方向軸(外曲輪↓中曲輪↓本丸)が認められるが、更に本丸背後の城山西麓は「後曲輪」とあり、松江城の表↓奥の空間秩序の構成を明確に規定する。

どうやら、城地全体から見た松江城の正面は、松江城図の表現(下辺の東側を前・表の方向、上辺の西側を後・奥の方向として描いている)からすれば、城山の東側に設定されていたと考えられそうである。二之丸(東西の二段構造)や三之丸(御殿配置)の状況からしても、東を前面に、西を上位に奥行きをとる動線計画となっており、縄張の空間表現を律する方向軸の基本姿勢は揺るがない。確かに主郭の並びや本丸内の動線は、松江城のシンボルである天守(南面)に対して北望するという、古来より用いられた上下関係の正統な表現形式となっているのだが、城内の主要動線が「東↓西」から、城郭の最深部ばかりは「南↓北」へと鮮やかなシフトの変化を付けるあた

り、御殿内で雁行する動線にも似た儀礼的な距離感を演出する効果が促されるなど、かなりの確信的な設計手法とさえ言える^(注7)。

最後に着目したのは、配置された軍事施設の仕様に關する完成度の問題である。先に、松江城図の曲輪表記に「東↓西(表↓奥)」の方向軸を確認したわけであるが、それは正面性の意識を高める「見せる」施設へのグレイドアップと、逆に「隠れた」向背部分での施設装備の省略化の対比をもたらすことにもなった。勿論、工事にあたる松江藩の財力や、外様大名堀尾氏の築城観も関係してくるのであるが、ここでは、従来の研究視点にはなかつた「見せる」城郭ならではの表現手法について、その特性の所在を確認しておきたい。例えば、松江城の内堀際の施設仕様では、東側の石垣・堀に対して西側は土手に樹木の植栽に留めている。また、城山東麓の一方への「外曲輪」の張り出しは、本丸南部・二之丸・馬溜等と同一座標での造成計画が顕著であり、そこには作爲的な意図が感じられるのであった。

軍事施設としての完全無欠の装備を図るのなら、城地の全方向の空間に対して等しく防禦機能の水準を保つべきである。しかるに、城郭空間が表裏に二分されて装備の差がそこに認められたとすれば、有事のシミュレーションを正面側の一方のみに特化して想定したのか、はたまた潜在性を有する城郭の性質により、縄張を施した当初から軍備強化への轉換の余地を残していたのかもしれない。ただ、どちらの場合もその時代特有の政治的な配慮の先行が感じられ、松江城のリアルな軍事性の評価とは何か?といった近世城郭の存在感と意義に迫る根幹の問題について、今後も真摯に検証を進めていく姿勢が求められよう^(注8)。

- (1) 岡田射雁「千鳥城の築造とその城下」(『郷土資料島根叢書第一篇』所収)より
- (2) 尼子氏の領国経営では、数カ国に亘る覇権の源泉として、中国山地全体の物流等を見据えた内陸部の掌握が居城(富田城)に求められる第一義の役割であったと思われる、むしろ新展開の海運の広域ネットワークに依拠しつつ、出雲国内での政治・経済力の管理運営を企図する堀尾氏の場合とは、城地の狭隘や鉄砲戦の不適といった軍事設備面での都合以上に、城郭の選択肢の前提となる基本的な使命の違いが読み取れる。
- (3) やはり城郭を機能させるためには、施設・空間面で何が求められるかの原点を問い直しておきたい。主郭(本丸・二之丸)だけで有事対応の完結を図ることは困難だと思われ、戦闘に特化した防禦施設のほか、動線に配慮しながら物資を運搬・貯蔵する空間や、城内で生活する人々のためのインフラ整備も、予備地の存在とともに不可欠な構成要素であったことは推察される。なお同様の城地の形態と城郭観は、島根県内の浜田城でも指摘できるところである。
- (4) 『武功雑記』所収の逸話に、江戸時代初頭の姫路城改修の際に、北西部の小山の影響で城の要害性に問題があると家臣から指摘された池田輝政が、あらためて自身の城郭観を述べるくだりがある。それによれば、始めから輝政は姫路城に籠城する気はなく、城の軍事機能に頼ろうとしなかったことが判る。考えてみれば、播磨一国(五二万石)を領する国主大名が一城に籠城したとしても、一時的な小競り合いの抵抗戦ならともかく、そこから勝機を得て大きく戦局を転回させることは難しい。今日に残る姫路城の建造物については、戦時を想定したシミュレーションを基に軍事施設としての一応の解説が施されているが、江戸時代の社会体制や軍事観念に裏付けられた近世城郭の正当な評価となっているかは、やはり疑問の余地を残していると言えよう。
- (5) 近世城郭を現有の施設面の軍事シミュレーションでのみ評価を行う危険性がある。施設(建造物)の軍事機能の抽出と、実際の城郭運用でのあり方の検証とは、それぞれの研究の意義と立場を理解した上で、概念の混同を
- 来たさないように進めていきたい。近世城郭の軍事性の本質に迫る解明には、まだまだ多方面からの研究視点を総合した考察の広がりが必要とされる。
- (6) 中澤克昭『中世の武力と城郭』一九九九年 吉川弘文館 など
- (7) こうして城郭史を介して見ると、城郭を構成する空間要素の必然の特性として、潜在的な城地部分が存在することの意味の系譜を判りやすく捉えられると思う。何れにせよ城地が大きければ、城内で物資の調達ができる様々なメリットを生じ、潜在的で曖昧な予備の存在であるがゆえに、用途の明瞭な具休物への顕在化という動態対応の可能性が広がり、強力な城郭空間の創出・展開へのポテンシャルも高くなる。しかるに、城山や城地の一定規模での取り込みを求める軍事構想の前提としては、顕在化(建造物の軍事機能の表象とその維持管理に特化)した狭義の城郭の範囲内では、実際の城郭の運用が完結しないことを意味するものであろう。
- (8) 越前松平氏の時代に三之丸(現在の島根県庁)に藩主の居所が移ったとされる。松江城での城地運用の変更を把握する為にも、それ以前の状況確認と比較検討が望まれる。
- (9) ともあれ、内堀で囲郭された城山と山麓一帯には多様な城地が展開しており、「本丸・二之丸・三之丸」の教詞を施された代表的な曲輪を、実際に所在する個々の小空間へと巧く割り当てるのは、明瞭な意図のもとに自他を分別する三つの区画の前提がない限り、甚だ困難である。そもそも、城内の曲輪群を三段論法で無理に規定・性格付ける発想自体が、顕在化した城郭部位の維持管理にかかる、実相と乖離した特殊な感覚(空間概念上の「四の丸」以降が成立しない)によるものと言え、実際、城地への曲輪呼称の付け方は各城でのバリエーションが著しい。
- (10) 本丸の正面入口は曲輪の南西に開口する。したがって空間構成のセオリーとしては、その対角線の方向(北東)の先に、雁行動線に伴う観念上の奥行きが設定され、そこに天守の置かれるべき座標が決められるのであった。天守の内部には井戸を取り込んでおくことから、その選地には水筋の確保を強く意識した崖窪地への立地が想定され、それが本丸当該地に見られる東側への不自然な張り出しに及んだものと推察される。

(11) 鉄砲櫓が有する唐破風の風雅な意匠の意味についてはよく判っていないが、天守に準ずる建造物の扱いを受けていたことは、座標設定の分析から容易に想像されるところである。また唐破風の施された櫓西面は、月照寺等の仏閣が佇む松江城背後の神聖な場と向い合う側であり、意識の上での対座の形象を表現するものだったかもしれない。

(12) 天守の南東部に向かって切れ込んでくる本丸東辺の城塁の折れは、注10でも述べた崖窪地の自然地形の影響を受けたものであり、築城以前の原風景の痕跡を留めるものと言える。ここでは三段に折れた墨線の重なりが見られるが、旧地形のラインに沿って築城時の新規設定の座標で崖面を固める際の、石垣の補強を兼ねて施されたジグザグ状の縁辺処理の状況が窺える。

(13) 赤穂城（兵庫県）の場合は、本丸内に築かれた天守台（建物としての天守は無い）の向きが城主の本丸御殿の座標と異なっており、不思議に思って配置計画の意図を探ろうと地図上での考察を試みたところ、浅野氏の菩提寺である花岳寺との視線対峙の関係がそこに指摘できると、今は考えるに至っていない。平城の赤穂城では、本丸内の天守台を城外からの視界に捉えることは不可能であるが、座標設定の根拠となる然るべき空間構成の作為が、事前の縄張段階で検討されていたものと推察される。

(14) 広島城の場合は、本丸の南方虎口に設置された馬出がそのまま二の丸とされ、主役の本丸に対する副次的な存在感（門前での下馬等、本丸に入る仕度を整える「控え」の儀礼空間としての機能）を、極端なまでにその空間構成の形態に投影させている。その他、元和期の新規築城の事例であるが、尼崎城・明石城（ともに譜代藩／兵庫県）等に、主役となる約一町余四方の「本丸」に従属する、曲輪内の区画として分出された二分の一規模の「二の丸」の存在が確認できる。

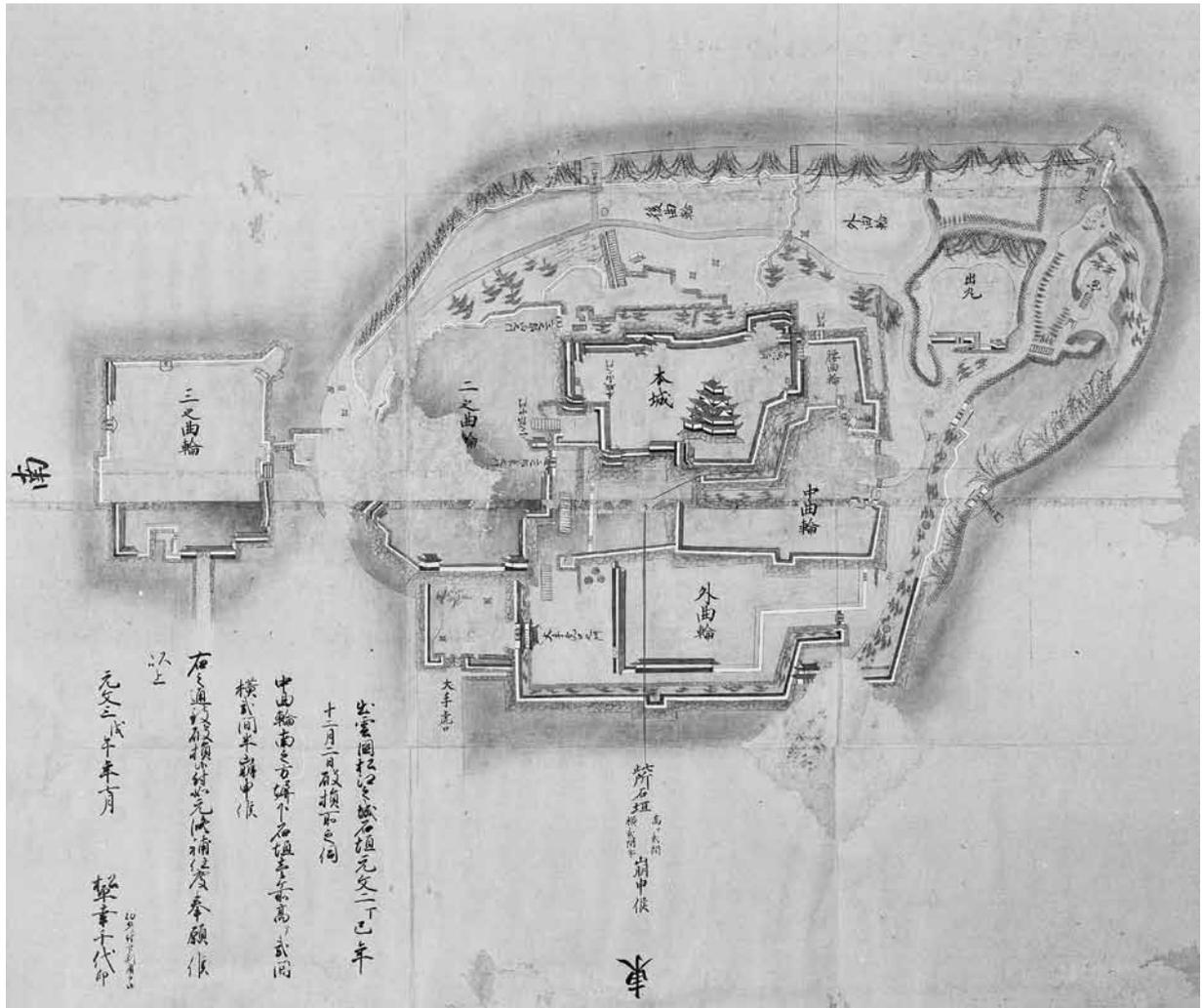
(15) 本丸の虚構性をそこに指摘することができる。移封で他所から新城主となった大名家では、管理者に過ぎない自身の立場を、居所を一步引いた二の丸に置くことで表現し、公儀としての徳川將軍家が、城郭の根本を象徴する「本丸」空間を専有するに相応しい対象と捉えたことだろう。城郭は自家の所有にかかる自由な作為の及ぶ物件ではなく、公儀に託された大切な「預かりも

の」であった。ここでは手を付けることのない「無」の状態こそが、むしろ高位の曲輪の望ましい環境と見なされていたのではなからうか。天守台の事例でもそうなのだが、あえて「有」の状態にしない「無」のままに保留しておくことの積極的な意味について、今後は考えてみる余地がありそうである。

(16) 城山を広幅の石段で登らせる通路の仕様としては、織田信長の安土城（滋賀県）をはじめ、近世城郭では明石城（兵庫県）や津山城（岡山県）等で目にするができる。城郭の要害性としての防禦機能には不利な一面もありそうだが、威儀を正して城内での移動を行う場面を、外部の視界にさらす儀礼空間としての演出は注目すべきものである。なお、松江城の「三之丸」に入する動線としては、東正面は対岸から張り出す小空間（表門の前に用意された「控え」の空間としての意味合い／注14参照）を経て、視界を遮らない土橋で結ばれていた。他の三辺（北・西・南）は橋上の移動を遮蔽しつつ、堀に沿った城内の見通しを避ける廊下橋が渡されており、その機能差の使い分けが歴然としていた。ここにも、「見せる」（かつ、その対置概念としての「隠す」）ことを強く意識した空間構成の具体事例が看取される。

(17) ここで指摘した城内の動線の二つの方向軸については、城下・郊外域を含む大きな視点での検証も今後進めていく必要がある。「東↓西」は大橋川の流れを遡る方向に沿って、上位の城地へ進むイメージを伴い、その先に天倫寺や月照寺といった城主ゆかりの寺院および、出雲大社が位置づけられる。また「南↓北」は大橋川で仕切られた白潟方面の城下町からの位相関係を意識させるものであり、堅町と名付けられた街区の存在自体が、そこから天守に導かれて城地に至る方向軸を前提としたものであった。いずれにせよ、城下・郊外域を踏まえた城郭空間全体の構成原理については、別の機会に私の試案を発表する予定である。

(18) 城郭の全てに亘って堅固に築きたいとする最強への城主の願望と、近世城郭に表現される実際の完成度とは別次元の問題である。完成度が高まれば、それだけ維持管理に手間がかかり、公儀としての幕府の感情にも注意を払わなければならない。したがって、有事に軍事強化の改変が可能であるのなら、平時は正面の意匠のみを整備するだけで事足りるとする、近世城郭ならではの「見切り」のバランス感覚が発揮されるのであろう。



「松江城図（石垣修理伺）」元文三年／兵庫県立歴史博物館 所蔵